

皇學館大学社会福祉学会小史

宮 城 洋一郎

社会福祉学会（本学会と記す）は、社会福祉学部発足年度末の平成11年2月に学会誌第1号を刊行した。ここで「創刊のことば」を記した高島昌二学部長は、「学部所属教員と在学生は、この機会に斯学の発展を一層推進すべく、「皇學館大学社会福祉学会」を組織し、その研究と教育活動の成果を発表するため、ここに『皇學館大学社会福祉論集』創刊号を刊行することとした」とし、社会福祉学部の教育研究活動の成果発表を目的にしていると述べている。

その上で、将来的には卒業生が巣立ち社会福祉機関・諸施設やその他関連職場において取り組むであろう諸問題について得られた体験、知見に関する労作を本論集に発表してくれることを期待したいこと、あるいは大学院の設置を視野に院生たちの研究発表のメディアとしての役割も同様に期待したいとしている。

このように、本学会の発足は、卒業生の実践、研究等の発表の場を目指し、大学と福祉現場とを結ぶ相互交流の深化をはかることにその狙いがあったといえよう。その意図を込めて本誌が号を重ねていくこととなる。

そこで、『皇學館大学社会福祉論集』の内容を見ていくと、発足から卒業生がでるまでの第1号から第4号までは、教員による執筆が続くが、第5号以降、大学院生による「研究ノート」「論文紹介」さらには「合同ゼミ合宿報告」「実践報告」など多彩な投稿があらわれてくる。

また、第2号以降、年度ごとの「学会通信」も紹介され、本学部の研究交流活動も逐一報告されていて、教育・研究の成果を教員、学部生、院生とともに共有していくところがうかがわれる。そして本学部が伊勢に移った平成23年10月には、卒業生らによる現場実践報告会を学部生の参加のもとで開催した。これは、倉陵祭行事の一環として実施された学内学会の行事であったが、卒業生が社会福祉現場の最前線で活躍し、それぞれが本学部で学んだ問題意識をふまえながら現場実践を重ね、その成果を学部生の前で披露するということで、本学部の教育成果を具現化する試みとなったことである（資料参照）

こうした研究・実践報告等に対し、本誌は、「卒業研究特集」を第5号から終刊の第16号まで「別冊」というかたちで発刊している。これは、年度ごとの演習担当者が推薦した卒業研究優秀作を掲載していくというものである。各演習から1ないし2名が選ばれ、その内容を後輩たちに伝え、卒業研究の範を示してもらおうという趣旨が込められている。

卒業研究は周知のとおり、学部学生にとっては、その4年間の修学の大成であり、自らの問題設定とその解決能力の育成という本学部の教育課題を体現しているものでもある。その意味で、卒業研究が先輩から後輩に受け継がれていくという趣旨は、年を追うごとに浸透し、卒業研究のレベルアップにつながり、指導の演習担当者からの助言とあいまって、その教育効果を上げていく意味を持ったことである。

このように、本学会は、多彩な可能性を内包する社会福祉学研究にあって、その教育を深め、本学部に集う教員、学生、院生、卒業生のネットワークを築く意味を持っていたのであった。

資料（『社会福祉学会論集』第14号別冊参照）

平成23年度社会福祉学会シンポジウム（平成23年10月29日）

テーマ「現場から発信する福祉のゆくえ ― 医療・介護・障がい・子ども・地域のいま ―」

開会の辞 社会福祉学部長・櫻井治男教授

コメンテーター 上野文枝助教、宮城洋一郎教授、山上賢一教授

パネラーの発題

- 一、医療からの発題 日本赤十字社山田赤十字病院医療社会事業部 社会福祉士 藤井典善（1期生）
- 二、介護福祉の現場からの発題 社会福祉法人 こもはら福祉会特別養護老人ホーム第三はなの里 介護福祉士 白水水希（9期生）
- 三、障がい福祉の現場からの発題 社会福祉法人 伊勢市社会福祉協議会 伊勢市重度身体障害者 デイサービスセンターくじら サービス管理責任者 阿竹秀之（2期生）
- 四、子ども福祉の現場からの発題 社会福祉法人ながさわ保育会 ながさわ保育園 保育士 大市明希（8期生）
- 五、地域福祉の現場からの発題 社会福祉法人伊賀市社会福祉協議会 いが若者サポートステーション 相談員 宮越敬子（9期生）

（みやぎ よういちろう・皇学館大学名誉教授）

【編集担当者附記】本稿は、『皇学館大学百三十年史』各説篇に掲載のため準備された原稿であるが、同書の刊行を見送ることとなったためここに掲載させていただいた。